

春のトマトキバガ対策 ～施設内での越冬を見越して～

海外からの侵入害虫「トマトキバガ」は令和5年の初確認以降、発生地域が拡大しています。卵、蛹、成虫で越冬し、5℃で60日生存できると報告があり耐寒性が強いため、本県のような降雪地域でも施設内での越冬が可能です。

トマト定植前から対策を行い、栽培期間中は施設内外を注意深く観察し、発生が見られたら直ちに薬剤防除を行いましょう。

1 施設周辺からの侵入防止対策

成虫の飛び込みおよび施設外への流出を防ぐため、施設開口部(入口・天窓・側窓)には防虫ネット(目合い0.8mm以下)*を設置しましょう。*0.4mmでコナジラミ類の侵入抑制も期待できます
施設内や周辺は、増殖源となる除草をこまめに行い、生息域を減らしましょう。
圃場外の野良生えトマトも繁殖場所になるため、抜き取り除去しましょう。

2 初期加害対策

育苗期～定植直後の加害は、被害が大きくなる傾向にあるため、苗に寄生していないか観察し、育苗期後半～定植までに薬剤防除を行いましょう。

○育苗期後半～定植までに使用できる灌注剤および株元散布剤(令和8年3月4日現在)

農薬名	使用方法	トマト	ミニトマト	希釈倍数・使用量	散布液量 (mL/株)	使用時期	本剤の使用回数
プレバソフフロアブル5	灌注	○	○	100倍	25mL/株	育苗期後半～定植当日	1回
ベリマークSC	灌注	○	○	25mL/400株	10～20L/400株 (25～50mL/株)		
プリロツソ粒剤オメガ	株元散布	○	○	2g/株	-	育苗期後半～定植時	

*IRACコード(殺虫剤の作用機構の分類系統)はいずれも28(ジアミド系)。

3 診断のポイントと初動対応について

初発時は、ハモグリバエ類の食害痕と似ていますが、被害が進むと幅広で白～肌色に袋状に透けたようになり、中に虫糞や幼虫が見えます(図1)。

幼虫は、体色が淡緑色～淡黄白色で頭部に黒い色の帯があるのが特徴です(図2)。
成虫は、日中は葉裏などに潜んでおり、その近くを歩くと飛び立ちます(図3)。

年間10～12世代発生し、卵～成虫までの期間は24～38日程度です。

発生を確認したら、捕殺し、被害葉は地中深くに埋めるか厚手のビニール袋等に密封し処分し、散布剤により防除してください(但し、同一系統の連用は避けましよう)。



図1 トマトキバガ食害葉



図2 老齢幼虫(約8mm)



図3 成虫(植物防疫所原図)

◇◇◇ 最新の農薬登録情報(<https://pesticide.maff.go.jp>)を確認して下さい ◇◇◇

福井県農業試験場病害虫防除室

福井県病害虫防除室

連絡先: 0776 (54) 9315

<https://www.pref.fukui.lg.jp/doc/noushi/kankyo/bouivo.html>

二次元コードをスキャンしてください→



農薬の飛散に注意しましょう

農薬の安全使用に努めて適期防除しましょう